

## 故 大林智徳君をしのんで

私はまだ大林君がいなくなってしまったとは信じられない気持ちでいる。物静かに少し前かがみの姿勢をして、今にも戸口をあけて部屋の中へ入ってきそうな気がする。昨年4月に気象研究所予報研究部第3研究室へ入られてからの大林君の活躍ぶりは、見事であったとしかいようがない。

気象大学の卒業論文のテーマであった孤峯を越す流れの問題について、ひきつづいて研究された成果は、1968年秋、1968年春、1969年秋の各学会で発表されて着実な展開を示され、これまで手がつけられていなかった水平2次元のモデル、3次元の2層モデルへと発展させられた。これらの成果を丁寧にまとめられた論文は、荒川正一氏との共著のものをはじめとして、今後順次学会誌に発表されるべく、その手順をととのえておられた最中に、不幸にも病気になられてしまった。(遺されたわれわれの手で、やがてこれらを印刷発表するつもりである。)

大林君は大気大循環にも興味を示され、気象研究所のコロキウム、GARPの部会、NPグループの会合には積極的に参加され、既に新田と共同で大規模な山岳系の影響を本格的に調べる数値実験にもとりかかっておられた。大林君の幅広い関心、旺盛な知識欲、しっかりし

た勉強ぶり、着実な仕事のすすめ方をみていてここにまたひとりの本格的な新人が気象界に現われたと、心ひそかによるこんでいたものである。彼の数学への傾倒とその造詣の深さには、初めから深く印象づけられていたが、そればかりか短い間にぐんぐんと気象力学や大循環論、数値予報のこともマスターされていったのには驚きに近い感じがした。或いはこうしたことが、彼の元来丈夫でなかった身体に重すぎる負担となり、その健康を害する因をなしたのだとすれば、痛恨に耐えない。

才能に恵まれ、豊かな可能性をもったひとりの若人が、学問研究の道についたばかりの所で倒れてしまったことは、無念ともなんともいいようもなく惜しまれる。彼は単なる秀才ではなかった。非常にヒューモラスであり、人の気持ちに対するやさしい思いやりをもち、また緻密な判断力の人であったが、これらをささえている強い意志が一本、心の奥底深く通っていたように私には思われる。

まことに短いおつきあいであったが、大林君の霊が安らかな眠りにつかれることを祈りつつ、遺されたわれわれも大林君に恥かしくない仕事をつづけていくことを誓いたいと思う。

(片山 昭, 新田 尚)

## 気象集誌 第II輯 第47巻 第3号 1969年6月

- 菊地原英和：線形領域の再現期間の理論とその計算 第2報 計算の実施と検討(東北本線の大雨に対する適用)……………133—144
- 鈴木栄一：定性的な変量による統計的判別理論とその気象への応用……………145—158
- 横山長之：係留的気球に取付けたベーンによる風の微変動の測定……………159—166
- 柳井迪雄・林 良一：対流圏上部から成層圏下部に貫入する大規模赤道擾乱……………167—182
- 柳井迪雄・時岡達志：傾圧円形渦中の軸対称な子午面運動：数値実験……………183—198
- 大西外史：海峡上の地表風について……………199—204
- 小倉義光・八木橋章子：平行平板間の流れの中に起るロール型対流……………205—218
- R.K. カプール・R.S. セクホン・A.S. ラマチャンドラムルティ・ラマナムルティ：氷晶核とその重なる発生地……………219—226
- 孫野長治・菊地勝弘・葛西俊之：雲の航空写真と気象衛星写真の比較—太平洋の雲、その4—……………227—234

### 要報と質疑

- 島貫 陸：拋物型偏微分程式のマトリックスによる解決……………235—237